

いっしぶんしゆ だるまめんべきがさん
一絲文守 「達磨面壁画賛」

翻刻

「左より起こる」

壁觀從來一事無、

後人錯學背盧都。

分皮分髓元無用、

斷臂師僧在半途。

とうこうあん
桐江菴主

訓読

へきかん じゆうらい
壁觀、從來一事も無く、

こうにんあやま しろと
後人 錯つて背盧都を学ぶ。

ひ ずい もと
皮を分かつち髓を分かつちも、元、無用、

だんび はんと
斷臂の師僧、半途に在り。

私訳

「嵩山少林寺の石室に」面壁「九年」したとしても、元来、一物として得るものは無い、

「それなのに」弟子たちは誤つて、一言をも発せぬ「禅の教え」を学んでいる。

「達磨は道副に教えの」皮を分かつち、「慧可には教えの」真髓を分かつちたが、もともと、用いるべきものとしてない。

臂を断ちきつ「て求法の証を見せ」た僧「慧可」ですら、まだ「悟りの道への」途中にいる。

語註

○一絲文守一「いっしもんじゅ」とも。慶長十三(一六〇八)〜正保三(一六四六)年。

一四歳にして相国寺雪岑和尚せつしんや沢庵宗彭たくあんそうほうに参ずる。寛永三(一六二六)年、出家し

再び沢庵に参じることとなる。その後、愚堂東寔ぐどうとうしよく・雲居希膺うんぎきように歴参し、愚堂の法

を嗣ついだ。後水尾上皇に厚い帰依を受け、寛永十五(一六三八)年、賀茂に靈源院、同

十八年、丹波(亀岡)に大梅山だいばいさんほうじようじ法常寺を開創する。同二十(一六四四)年、近江(滋

賀県東近江市)永源寺の第九十世に進住する。正保三(一六四六)年三月十九日遷化。

世寿三十九。法臘二十。延宝六(一六七八)年、「定慧じようえみ明光みょうこう仏頂ぶつちよう国師こくし」の号を賜った。

○本偈頌は、『佛頂国師語録』卷三「贊」の「達磨大師」(T81 160a)の中のひとつと考えられるが、『語録』の転句の末の三字は、「甚軽忽きようこつ(甚だ軽忽)」とある。

○壁觀へきくわん禅宗第一祖、菩提達磨ぼだいだるまが面壁九年したこと。達磨は南インドから中国に渡り、梁の都にて武帝ぶていに面会したが、意にかなわず、嵩山少林寺に安居、面壁「石室の壁に向かつて坐る」して九年を過こした。このことから、達磨のことを「壁觀へきくわん婆羅門ばらもん」へきかんのばらもんとも言う。

○觜盧都しゆろと口を閉じる、一言をも発さぬ様。また、花などの開かぬ様を言う。

○分皮分髓ぶんぴぶんずい『景德伝燈録』達磨章に出る、達磨が西帰する際、弟子にそれぞれ所得の境界を述べさせた故事 (T51-219b-c) に基づく。達磨は「道副どうぶは皮を得、尼総持にそうじは肉を得、道育どういくは骨を得、慧可は髓を得た」と述べた。

○桐江菴とうかう亀岡・法常寺内に一絲文守が結んだ庵。